



ラオスで感じたこと

都立新宿山吹高等学校 2年 渡邊 和花

今回の研修は、私にとって国際協力のあり方を考えるきっかけになりました。

ルアンパバーンでは青年同盟が行っている英語の授業に参加しました。ここでは主に公務員の方が6か月のコースを受講されています。実際に話してみると、6か月という短期間で会話がスムーズにできて、学習意欲の高さに驚きました。ラオスの発展には英語教育が大事なのだろろと感じました。しかし、JICAの方の話聞いてそんな単純なことではないとわかりました。まずラオス国内でも様々な民族があり、母国語のラオ語でさえ読み書きまでは不十分な人もいます。またラオスは5か国に囲まれる内陸国であり、かつてはフランスなどの植民地となっていました。そんな中で住んでいる地域や民族の違い、周辺国との関わりでどの外国語を教えればいいのかが一様ではありません。語学教育1つをとっても国ごとに求められるものが違うのだとわかりました。

今回初めてラオスを訪れて、ラオスのゆったりした雰囲気やラオスの方の優しさを感じることがたくさんありました。その一方で、どんどん開発が進められています。ビエンチャンでは道路もきちんと舗装されていて、想像していたよりもきれいでした。これからも定められた目標に向かい開発が進められていくと思いますが、支援する側の都合だけでなく、ラオスの方の望むものが見失われないことが大事なのではないかと思いました。